

女子青年の育児に対する態度に関連する要因 - 性役割観、子どもに対する感情、母親の養育態度の影響 -¹

猪木 省三・加藤 美紀²

合計特殊出生率は1992年に1.50となった後も下降傾向が続き、2005年には1.26となった。その後、上昇に転じたが2009年は1.37で依然として低い水準にある。一方、女子の大学進学率は上昇傾向にあり、キャリア志向・晩婚化はますます進むものと思われる。少子高齢化社会の中での少産化傾向は単に個人の問題ではなく、日本社会全体の問題となっている(柏木・大野・平山、2006)。

少子化対策として、日本国政府が策定したものとして、エンゼルプラン(1994)、新エンゼルプラン(1999)、子ども・子育て応援プラン(2004)があげられる。これらは、地域・社会での子育て支援の制度や環境条件の整備に重点をおいたものとなっている。柳澤(1998)は、現在、行政が行っている多くの育児支援は、育児というよりは「育児代理」であり、親が育児をきちんと行える条件を保障することの重要性を論じている。さらに、柏木(2001a、2001b、2005)は、少子化の原因は経済的な理由よりも、女性が子どもを産むことをめぐる心の問題や日本の母親に育児不安が強いことをあげている。

少子化対策としては、従来行われたきたような子育て支援の環境を整備することだけではなく、親となる人々が不安をもたず、きちんと育児に関わることができるような働きかけも重要である。これまで、日本では、小学校から高等学校までの学校教育の中で、子育てに関する事項は家庭科の中でわずかに取り上げられているに過ぎず、育児に対する考え方や子どもについての見方を形成するという点が不十分であったと考える。これが、育児に対する不安をもたらすひとつの要因と見ることができる。

育児は個人的な問題ではあるが、個人の育児に対する態度は社会全体に反映され、時代を作る働きを有する。一方、社会や時代的背景は個人に強い影響を与えるものである。近年の社会現象としてみられる別居結婚、単身赴任、夫婦別姓等の動きの中で、これから親となる第二次ベビーブーム世代の女子青年は、どのような家庭を作り母親となろうとしているのか、親子関係をどうとらえようとしているのか、その育児に対する態度を明らかにしていきたいと考えた。これにより、学校教育の中で、育児についてどのような教育を行うことが必要であるかの示唆を得ることができるであろう。女子青年のもつ育児に対する態度は社会問題であり、少子化対策に対する貴重な知見が得られると考える。

従来、親子関係の研究は、子どもの側からなされたものは多いが、女性であれば母性は当然備わっているとされる母性神話の中で、母親に視点をおいたものはあまり見られない。花沢(1992)は、母子関係の研究は児を中心にしてきたが、母の側からの研究も必要であろうと述べている。また、大日向(1988)は、母性を生得的なものとして、その規定要因について実証的な検討が行われてこなかったと指摘している。

近年、子ども自身が認知した親の養育態度と青年期の子どもの性格や行動との関係に関する研究は多くなされているが、将来親となる女子青年を対象とした母性意識に関する研究は少ない。本研究は、

1 本研究は文部科学省の科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)研究課題番号10610133)による補助を得て行われた。

2 元県立広島女子大学

女子青年の育児に対する考え方、すなわち育児に対する態度を軸に、対象者の性役割観、子どもに対する感情、対象者から見た母親の養育態度との関連性を明らかにしようとするものである。

従来の育児に関する研究の中で、女子青年の育児に対する態度を調査したものは、あまり多くは見られない。しかも、その中の多くのものは、育児に対する態度や子どもに対する感情について、いくつかの質問項目への回答をもとに、回答の分布を回答率で求める単純集計を行ったものである(阿藤・高橋・中野・渡邊・小島・金子・三田、1994；笠間、1996；小嶋・青木、1998；西本、1984；山本・竹元・宮城、2000)。

育児に対する態度、子どもに対する感情やそれらに関連する要因についての研究としては、以下のようなものがある。山田(1987)は男女大学生を対象に親志向意識に関する研究を行い、男女ともに伝統的性役割観を有する者が多く、対児感情の男女差は少ないが、自分の子どもを持つことに関しては女子の方が慎重であることが分かった。池田・中川・上田・小沢(1985)は女子青年の親になることについての準備性の研究を行い、女性としての性同一性を獲得していない者は子どもが欲しくないと考えていることが明らかになった。西村・新道(1988)は高校生の育児への積極性と対児感情の研究を行い、女子青年は子どもを生み育てるという母性を肯定している者は少ないが、母性意識の側面である良い対児感情をほとんどの者が持っていることが示された。青木・松井(1987)は女子短大生における乳幼児への接触経験と対児感情の関係の研究を行い、接触経験を持つの方が対児感情の接近感情は高いが回避感情には差が見られないことが分かった。嘉数・島袋・當山・喜友名・友利・廣瀬(1997)は短期大学保育科の学生の子どもの感情に関する研究を行い、保育職を志望する者の方が、子どもをより肯定的にとらえていることが示された。

子どもたちが親になった時、養育されてきたことを再び繰り返す可能性は極めて強いことを考えると、次世代の母親となる女子青年の育児に対する態度を調べることは重要な課題と思われる。しかし、上に見たように、女子青年の育児に対する態度やそれに関連する要因を検討した研究はほとんど見られない。われわれはこれまでに、女子青年の育児に対する態度について、以下のような研究を行ってきた。まず、日本と台湾の女子青年を対象として、育児に対する態度と女性性役割観、子どもに対する感情、男性の育児参加への期待との関係を検討した(Inoki & Ko, 1996；加藤・柯・猪木、1997)。また、育児に対する態度と男性及び女性性役割観、子どもに対する感情、男性の育児参加への期待との関係を、女子青年のみ(Inoki, 1999)及び女子青年と男子青年とを比較して(Inoki, 2000)検討した。これらの研究から、女子青年の育児に対する態度に強く関連しているのは子どもに対する感情であり、育児の肯定観は子どもへの肯定的な感情と、育児への否定観は子どもへの否定的な感情と、それぞれつながりがあることが示された。育児に対する態度とそれ以外の要因との関係については、一貫した結果を得ることができなかった。

そこで、本研究においては、育児に対する態度とそれに関連する要因について再度検討することを目的とした。育児に対する態度に関連する要因としては、性役割観、子どもに対する感情、女子青年の母親の養育態度を取り上げた。性役割観については、社会から求められる女性の役割と自分自身が考える女性の役割との葛藤すなわち女性役割葛藤と、社会から求められる女性の役割と男性の役割とを識別して認知している程度すなわち性役割識別度を中心に検討する。子どもに対する感情は従来のわれわれの研究と同一の尺度を用いて、再度検討する。女子青年の母親の養育態度については、自分自身が受けてきた育児のあり方が、育児に対する態度や子どもに対する感情とどのような関係にあるのかを明らかにする。なお、これまでは4年制大学の女子学生を対象としていたので、あらたに短期大学の女子学生を対象として、両者の違いについて吟味する。

本研究の結果から、少子化対策として、女子青年の育児に対する態度を形成するためには、学校教

育においてどのようなことに留意すべきかについての示唆を得られるものとする。

方 法

調査協力者

広島市及びその周辺の短期大学・大学に通う女子短期大学生415名、女子大学生524名、計939名であった。そのうち、欠測値があったため女子短期大学生9名、女子大学生3名をデータ分析から除外した。また、母親が不在であるため自分の母親の養育態度について回答できないとした女子短期大学生6名、女子大学生9名もデータ分析から除いた。したがって、データ分析の対象となったのは、女子短期大学生400名（1年生210名、2年生190名）、女子大学生512名（1年生143名、2年生97名、3年生161名、4年生111名）、計912名分のデータであった。

調査手続

広島市及びその周辺の短期大学・大学で授業を担当している教員に依頼して、担当授業科目の中で学生の同意を得て、調査を実施してもらった。初めに調査の趣旨と回答方法を説明した後に、回答者の自己ペースで自由な速さで回答を求めた。調査実施に要した時間は平均約20分であった。調査時期は、女子短期大学生が2000年7月、女子大学生が1999年7月であった。

調査内容

基本的属性 回答者について、短期大学・4年制大学の別、学年を尋ねた。また、就業と結婚についての考え（以下、就業・結婚観という。）を問うために、7つの選択肢のうちから1つを選択するように求めた。それらの選択肢は以下の通りであった。「1. 結婚しないで生涯仕事続けるのがよい」（非婚就業継続群）、「2. 結婚するが子供は持たないで、生涯仕事続けるのがよい」（結婚非出産就業継続群）、「3. 結婚して子供を育てながら、生涯仕事続けるのがよい」（結婚出産就業継続群）、「4. 結婚して育児中は専業主婦で、育児がすんだ後は再就職するのがよい」（結婚出産再就職群）、「5. 結婚して子供が生まれたら専業主婦になるのがよい」（結婚出産後専業主婦群）、「6. 結婚したら専業主婦になるのがよい」（結婚後専業主婦群）、「7. その他」（その他群）。

育児に対する態度 荒川（1992）の作成した育児に関する考えを問う30項目からなる尺度を用いて、各項目について「全くそう思わない（1点）」から「とてもそう思う（5点）」の5段階で回答を求めた。

性役割観 伊藤（1978）のMHFテストを使用した。男性性項目、女性性項目、人間性項目の各10項目の計30項目について、自分にとってどの程度重要だと思うか（個人的評価）、女性にとってどの程度重要だと思うか（女性役割期待）、男性にとってどの程度重要だと思うか（男性役割期待）の3種類の質問を行った。各項目について「全く重要ではない（1点）」から「とても重要である（5点）」の5段階で回答を求めた。

子どもに対する感情 花沢（1991）の対児感情の項目をもとに、子ども（小学校に入学するまでの子ども）のイメージを問う30項目からなる尺度を作成し、各項目について「全くそう思わない（1点）」から「とてもそう思う（5点）」の5段階で回答を求めた。

母親の養育態度 親子関係診断尺度（EICA）（辻岡・山本、1976）の情緒的支持因子、同一化因子、統制因子、自律性因子の各10項目の計40項目について、「いいえ（1点）」から「はい（3点）」の3段階で回答を求めた。

結 果

基本的属性

就業・結婚観の選択回答者数は、1が18名、2が20名、3が312名、4が403名、5が79名、6が46名、7が26名であった。大学別に見ると、女子短期大学生では3（結婚出産就業継続群）を選択する者が少なく5（結婚出産後専業主婦群）・6（結婚後専業主婦群）を選択する者が多かったが、女子大学生では逆に、3を選択する者が多く5・6を選択する者は少なかった。

なお、大学別及び就業・結婚観別に分析しても大きな違いは見られなかったため、以下では群間の比較を除いて、全員のデータをこみにして分析した結果を報告する。

尺度の構成

各尺度から得られたデータは、以下の通り処理した。

育児に対する態度 30項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化(7.663, 4.906, 1.467, 1.262, 1.065, ...)と因子の解釈可能性を考慮すると、2因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度2因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、十分な因

Table 1 育児に対する態度尺度の因子分析結果 (Promax回転後の因子パターン)

| 項 目 | I | II |
|--------------------------------|------|------|
| 17. 育児は幸せを感じさせるものである | .79 | .08 |
| 19. 育児は元気を与えてくれるものである | .77 | .05 |
| 15. 育児は嬉しいものである | .73 | .02 |
| 13. 育児は感動があるものである | .71 | .12 |
| 9. 育児は喜びを伴うものである | .69 | .06 |
| 21. 育児は夢があるものである | .68 | .02 |
| 3. 育児は温かいものを感じさせるものである | .67 | -.07 |
| 25. 育児は面白いものである | .67 | -.01 |
| 11. 育児はやってみたいことである | .64 | -.16 |
| 27. 育児は今まで見えなかったものを見せてくれるものである | .62 | .13 |
| 5. 育児は自分を成長させるものである | .61 | .10 |
| 7. 育児はやりがいがあるものである | .60 | .01 |
| 29. 育児は充実したときが過ごせるものである | .57 | -.04 |
| 1. 育児は楽しそうなものである | .54 | -.31 |
| 23. 育児はしていると優しくなれるものである | .52 | -.11 |
| 20. 育児は疲れるものである | .12 | .73 |
| 18. 育児は苦勞の多いものである | .21 | .69 |
| 10. 育児はストレスがたまるものである | -.09 | .65 |
| 12. 育児はつらいものである | -.10 | .62 |
| 30. 育児は時々投げ出したくなるものである | -.14 | .59 |
| 16. 育児は不安なものである | .16 | .55 |
| 4. 育児は面倒くさいものである | -.34 | .53 |
| 14. 育児は煩わしいものである | -.24 | .53 |
| 24. 育児は忍耐を必要とするものである | .24 | .50 |
| 28. 育児は責任が重すぎるものである | -.01 | .49 |
| 22. 育児は忙しいものである | .25 | .49 |
| 6. 育児は怖いものである | -.07 | .41 |
| 因子間相関 | I | II |
| | I | -.04 |
| | II | - |

子負荷量を示さなかった3項目を分析から除外し、残りの27項目に対して再度主因子法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関をTable 1に示す。なお、回転前の2因子で27項目の全分散を説明する割合は45.2%であった。

第1因子は15項目から構成されており、育児は幸せを感じさせるもの、元気を与えてくれるもの、嬉しいものなどの育児の肯定的側面を表す項目が高い負荷量を示していた。そこで「育児肯定」因子と命名した。第2因子は12項目から構成されており、育児は疲れるもの、苦勞の多いもの、ストレスがたまるものなどの育児の否定的側面を表す項目が高い負荷量を示していた。そこで「育児否定」因子と命名した。

各因子の内的整合性を検討するために α 係数を算出したところ、育児肯定は0.92、育児否定は0.84と十分な値が得られた。

各因子に高い負荷量を示した項目の平均値を算出することにより、育児肯定得点(平均4.12、 $SD=0.61$)、育児否定得点(平均3.84、 $SD=0.55$)とした。

Table 2 子どもに対する感情尺度の因子分析結果 (Promax回転後の因子パターン)

| 項目 | I | II |
|------------|------|------|
| 26. いらだたしい | .75 | .05 |
| 14. じゃまな | .75 | -.10 |
| 18. わずらわしい | .75 | -.03 |
| 10. めんどくさい | .75 | -.11 |
| 28. かったるい | .72 | -.04 |
| 4. うっとうしい | .68 | -.17 |
| 30. やかましい | .62 | -.01 |
| 20. しつこい | .61 | .14 |
| 16. うるさい | .56 | .00 |
| 24. くさい | .56 | .13 |
| 6. じれったい | .54 | .13 |
| 12. こわい | .53 | .12 |
| 22. ださい | .50 | .08 |
| 8. むずかしい | .43 | .18 |
| 27. うれしい | .06 | .69 |
| 9. いとおしい | -.11 | .66 |
| 19. すばらしい | .14 | .63 |
| 13. うつくしい | .19 | .61 |
| 15. たのしい | -.12 | .60 |
| 29. きれいな | .16 | .58 |
| 25. すがすがしい | .16 | .58 |
| 3. あたたかい | -.05 | .58 |
| 7. ほほえましい | -.16 | .56 |
| 21. おもしろい | -.01 | .52 |
| 17. あいくるしい | .02 | .51 |
| 23. いじらしい | .21 | .48 |
| 5. あどけない | -.03 | .46 |
| 1. かわいらしい | -.31 | .46 |
| 11. あかるい | .01 | .42 |
| 因子間相関 | I | II |
| I | - | -.33 |
| II | | - |

性役割観 伊藤(1978)及び伊藤・秋津(1983)にしたがって以下のような得点を算出した。自分にとってどの程度重要だと思うか(個人的評価)、女性にとってどの程度重要だと思うか(女性役割期待)、男性にとってどの程度重要だと思うか(男性役割期待)という質問への回答の得点を、男性性項目、女性性項目、人間性項目の各10項目について合計して、それぞれの項目の個人的評価得点、女性役割得点、男性役割得点とした。また、個人的評価と女性役割期待、個人的評価と男性役割期待、女性役割期待と男性役割期待の得点の差の絶対値を、それぞれ女性役割葛藤、男性役割葛藤、性役割識別とし、男性性項目、女性性項目、人間性項目の各10項目について合計して、それぞれの項目の女性役割葛藤得点、男性役割葛藤得点、性役割識別得点とした。

子どもに対する感情 30項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化(7.488、4.468、2.092、1.190、1.133、...)と因子の解釈可能性を考慮すると、2因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度2因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった1項目を分析から除外し、残りの29項目に対して再度主因子法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関をTable 2に示す。なお、回転前の2因子で29項目の全分散を説明する割合は40.9%

あった。

第1因子は15項目から構成されており、いとおいしい、うれしい、たのしいなどの子どもへの接近傾向を表す項目が高い負荷量を示していた。そこで「子ども接近」因子と命名した。第2因子は14項目から構成されており、じゃまな、めんどくさい、わずらわしいなどの子どもからの回避傾向を表す項目が高い負荷量を示していた。そこで「子ども回避」因子と命名した。

各因子の内的整合性を検討するために α 係数を算出したところ、子ども接近は0.87、子ども回避は0.90と十分な値が得られた。

各因子に高い負荷量を示した項目の平均値を算出することにより、子ども接近得点(平均3.43、 $SD=0.61$)、子ども回避得点(平均2.58、 $SD=0.71$)とした。

母親の養育態度 辻岡・山本(1976)にしたがって、情緒的支持因子、同一化因子、統制因子、自律性因子の各10項目の得点を算出した。

尺度得点間の相関

育児に対する態度、性役割観、子どもに対する感情、母親の養育態度のすべての得点の相互相関を算出した。性役割観の各得点間では相互相関が強いものが見られたが、性役割観と育児に対する態度、子どもに対する感情、母親の養育態度の得点との相互相関はすべて0.4未満であった。育児に対する態度、子どもに対する感情、母親の養育態度の各得点の相互相関でも強い相関関係が見られたものは少なく、育児に対する態度と強い相関関係が見られたのは子どもに対する感情のみであった。育児に対する態度と性役割観、子どもに対する感情、母親の養育態度の得点との相互相関の結果をTable 3に示す。

因果関係

性役割観、子どもに対する感情、母親の養育態度の各得点が育児に対する態度の2つの得点に与える影響を検討するために、育児に対する態度の2得点を基準変数、性役割観、子どもに対する感情、母親の養育態度の各得点を説明変数として重回帰分析を行った。育児肯定得点に対しては、子ども接近得点、子ども回避得点、女性性項目の性役割識別得点、男性性項目の女性役割得点、母親の情緒的支持得点、人間性項目の男性役割葛藤得点の標準偏回帰係数が有意であった。育児否定得点に対しては、子ども回避得点、男性性項目の性役割識別得点、女性性項目の性役割識別得点、母親の情緒的支持得点の標準偏回帰係数が有意であった。0.4を超える標準偏回帰係数が得られたものを見ると、育児肯定得点に対して子ども接近得

Table 3 育児に対する態度尺度と他の尺度の得点の相互相関

| 尺度得点 | 育児肯定 | 育児否定 |
|-----------|----------|----------|
| 個人的評価 | | |
| 男性性項目 | .27 *** | .17 *** |
| 人間性項目 | .28 *** | .13 *** |
| 女性性項目 | .09 ** | .06 |
| 女性役割期待 | | |
| 男性性項目 | .10 ** | .01 |
| 人間性項目 | .24 *** | .13 *** |
| 女性性項目 | .16 *** | .17 *** |
| 男性役割期待 | | |
| 男性性項目 | .23 *** | .17 *** |
| 人間性項目 | .25 *** | .17 *** |
| 女性性項目 | .06 | -.02 |
| 女性役割葛藤 | | |
| 男性性項目 | .03 | .12 *** |
| 人間性項目 | -.10 ** | .09 ** |
| 女性性項目 | .04 | .13 *** |
| 男性役割葛藤 | | |
| 男性性項目 | -.14 *** | -.06 |
| 人間性項目 | -.21 *** | -.01 |
| 女性性項目 | .03 | .17 *** |
| 性役割識別 | | |
| 男性性項目 | .04 | .13 *** |
| 人間性項目 | -.07 * | .06 |
| 女性性項目 | .04 | .19 *** |
| 母親の養育態度 | | |
| 情緒的支持 | .20 *** | -.14 *** |
| 同一化 | .14 *** | -.05 |
| 統制 | .03 | .06 |
| 自律性 | .05 | .01 |
| 子どもに対する感情 | | |
| 子ども接近 | .53 *** | -.06 |
| 子ども回避 | -.34 *** | .49 *** |

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

Table 4 大学別の子どもに対する感情及び育児に対する態度の得点の平均値とSDおよびt検定の結果

| 尺度得点 | 4年制大学 | | 短期大学 | | t値 |
|-------|-------|------|------|------|----------|
| | 平均 | SD | 平均 | SD | |
| 子ども接近 | 3.45 | 0.60 | 3.42 | 0.62 | 0.83 |
| 子ども回避 | 2.57 | 0.66 | 2.60 | 0.77 | -0.47 |
| 育児肯定 | 4.19 | 0.55 | 4.04 | 0.67 | 3.75 *** |
| 育児否定 | 3.89 | 0.53 | 3.78 | 0.57 | 3.23 ** |

** p<.01 *** p<.001

Table 5 就業・結婚観別の子どもに対する感情及び育児に対する態度の得点の平均値とSDおよび分散分析の結果

| 尺度得点 | 1・2群 | | 3群 | | 4群 | | 5・6群 | | F値 |
|-------|------|------|------|------|------|------|------|------|-----------|
| | 平均 | SD | 平均 | SD | 平均 | SD | 平均 | SD | |
| 子ども接近 | 3.12 | 0.56 | 3.42 | 0.58 | 3.49 | 0.61 | 3.43 | 0.63 | 4.49 ** |
| 子ども回避 | 3.02 | 0.84 | 2.62 | 0.69 | 2.50 | 0.67 | 2.60 | 0.75 | 7.33 *** |
| 育児肯定 | 3.34 | 0.95 | 4.10 | 0.58 | 4.22 | 0.53 | 4.10 | 0.60 | 27.50 *** |
| 育児否定 | 4.12 | 0.67 | 3.90 | 0.51 | 3.80 | 0.53 | 3.70 | 0.60 | 8.27 *** |

** p<.01 *** p<.001

1群：非婚就業継続群，2群：結婚非出産就業継続群，3群：結婚出産就業継続群，4群：結婚出産再就職群，5群：結婚出産後専業主婦群，6群：結婚後専業主婦群，7群：その他群

点、育児否定得点に対して子ども回避得点が大きな影響を及ぼしていることが明らかにされた。

群間の比較

育児に対する態度及び子どもに対する感情の得点について、短期大学と4年制大学及び就業・結婚観による群間の比較を行った結果をTable 4及びTable 5に示す。短期大学と4年制大学の比較では育児に対する態度の2つの得点で平均値に有意な差が見られ、4年制大学の方が育児肯定得点、育児否定得点とも高かった。就業・結婚観では1、2、5、6、7を選択した者が少なかったため、1と2、3、4、5と6の4群に分類し直して群間の比較を行った。1と2の群と他の3群との間で平均値に有意な差が多く見られることがわかった。

考 察

育児に対する態度、子どもに対する感情について因子分析を行ったところ、われわれのこれまでの研究と同様に、育児に対する態度では育児肯定因子と育児否定因子が、子どもに対する感情では子ども接近因子と子ども回避因子が、それぞれ抽出された。育児に対する態度に影響を及ぼしている要因について分析したところ、尺度得点間の相関においても、育児に対する態度を基準変数とする重回帰分析においても、育児肯定得点は子ども接近得点から、育児否定得点は子ども回避得点から、それぞれ大きな影響を受けていることが示された。しかし、他の得点については、標準偏回帰係数が有意なものもあったが、その数値の大きさから判断すると、子どもに対する感情に比べると育児に対する態度に及ぼす影響は小さいものであった。

本研究においては、女子青年の育児に対する態度に影響する要因を検討したが、これまでの研究と

同様に子どもに対する感情が育児に対する態度に大きな影響を及ぼしているという結果であった。本研究では、これまでの研究で検討された要因に加えて女子青年が認知している母親の養育態度を取り上げたが育児に対する態度との関連は弱いものであった。また、これまでの研究では4年制大学の女子学生を対象としていたのに加えて、あらたに短期大学の女子学生を対象としたが、育児に対する態度に影響する要因については、差が見られなかった。なお、育児に対する態度の2つの得点が、いずれも4年制大学の方が高かった。

われわれのこれまでの研究と本研究の結果を総合すると、女子青年の育児に対する態度に子どもに対する感情が強い影響を及ぼすことが明らかとなった。柏木(2001a, 2001b, 2005)は少子化の原因として育児に対する考え方をあげている。この育児に対する考え方に対して、子どもについてどのように考えているかが重要な要因であると考えられる。少子化対策として従来行われてきた育児環境の整備だけでなく、子どもについての適切な見方が形成されることが重要であるといえよう。

では、子どもについての適切な見方が形成されるためには、どのようなことが必要であろうか。これまで学校教育の中で子どもについての見方を養うことについては、あまり取り上げられていなかった。家庭科をはじめとする、学校教育における内容の充実が求められよう。また、われわれのこれまでの研究と本研究では、子どもに対する感情を規定する要因としてあげられるものが見いだされていない。学校教育だけでなく、子どもに対する感情を育むのに大きな影響力を持つ要因を明らかにすることも今後の課題といえる。たとえば、中学校や高等学校の家庭科で一部行われている保育所での保育体験は、子どもとのふれあいを通して、適切な子どもに対する見方を培うことにつながるかもしれない。

さらに、子どもに対する感情そのものを、より詳細に検討することも必要であろう。これまで子どもに対する感情や対児感情は肯定・否定の2つの因子でとらえられてきたが、子どもに対する感情の他の側面をとらえた因子を加えることで、より詳細な検討が可能となろう。

また、本研究では女子大学生を対象としたが、男子大学生や、中学生・高校生を対象とした研究も行い、本研究で得られた結果の一般性を確認することも求められる。

少子化対策がわが国の重要な政策課題となっている現在、単なる育児環境の整備にとどまらない、教育的・心理的側面からの取り組みが必要であり、そのためには、育児に対する態度や子どもに対する感情を中心としたさらなる研究が必要である。

引用文献

- 青木まり・松井 豊 (1987). 女子青年における女性性の発達の様相(2) —乳児の表情の評定による母性準備性の検討 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 244-245.
- 荒川普子 (1992). 女子青年の育児への積極性 広島女子大学家政学部児童学科卒業論文(未公刊)
- 阿藤 誠・高橋重郷・中野英子・渡邊吉利・小島 宏・金子隆一・三田房美 (1994). 独身青年層の結婚観と子供観—第10回出生動向基本調査(独身者調査)の結果から 人口問題研究, 210, 29-49.
- 花沢成一 (1991). 妊婦における妊娠動機と対児感情—母性心理学研究(21) 日本心理学会第55回大会発表論文集, 413.
- 花沢成一 (1992). 母性心理学 医学書院
- 池田紀子・中川礼子・上田礼子・小沢道子 (1985). 親になることとその情報源について(第1報)—女子短大生の場合 母性衛生, 26, 336-340.

- Inoki, S. (1999). The relationship of attitude toward child-rearing to views on sex roles, feelings to children, and expectation for males' participation in child-rearing of female university students. *Bulletin of Faculty of Human Life and Environmental Science Hiroshima Women's University*, 5, 77-83.
- Inoki, S. (2000). The relationship of attitude toward child-rearing to views on sex roles, feelings to children, and expectation for males' participation in child-rearing of male and female university students. *Bulletin of Faculty of Human Life and Environmental Science Hiroshima Prefectural Women's University*, 6, 53-62.
- Inoki, S. & Ko, L. (1996). The relationship of attitude toward child-rearing to views on sex roles, feelings to children, and expectation for males' participation in child-rearing of female university students in Japan and Taiwan. *Bulletin of Faculty of Human Life and Environmental Science Hiroshima Women's University*, 2, 113-118.
- 伊藤裕子 (1978). 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, 26, 1-11.
- 伊藤裕子・秋津慶子 (1983). 青年期における性役割観および性役割期待の認知 教育心理学研究, 31, 146-151.
- 嘉数朝子・島袋恒男・當山りえ・喜友名静子・友利久子・廣瀬真喜子 (1997). 大学生の「子どもに対する感情」に関する研究—保育職志望度との関連で 琉球大学教育学部紀要, 51, 207-213.
- 笠間美佳 (1996). ジェンダー統計からみた我が国の現状①—結婚観・子供観の変化 統計, 47, 53-54.
- 柏木恵子 (2001a). 子どもという価値—少子化時代の女性の心理 中央公論新社
- 柏木恵子 (2001b). 子育て支援を考える—変わる家族の時代に 岩波書店
- 柏木恵子 (2005). なぜ少子化か—少子化の何が問題か／何をすべきか 月刊自治フォーラム 553, 17-24.
- 柏木恵子・大野祥子・平山順子 (2006). 家族心理学への招待—今, 日本の家族は? 家族の未来は? ミネルヴァ書房
- 加藤美紀・柯 龍蘭・猪木省三 (1997). 女子青年の育児に対する態度に関する日本と台湾の比較 広島女子大学生生活科学部紀要, 3, 107-113.
- 小嶋嘉子・青木紀久代 (1998). 未婚女性の結婚観・子育て観に見る少子化の心理学的要因—ライフプランの多様化に伴うモラトリアム心性・有子既婚女性との比較検討 児童育成研究, 16, 24-34.
- 西本 脩 (1984). 高等学校女子生徒の育児に対する態度について 大阪樟蔭女子大学論集, 21, 127-142.
- 西村知子・新道幸恵 (1988). 思春期女子とその母親との相互関係について—母性意識に焦点を当てて 母性衛生, 29, 56-65.
- 大日向雅美 (1988). 母性の研究—その形成と変容の過程: 伝統的母性観への反証 川島書店
- 辻岡美延・山本吉廣 (1976). 親子関係診断尺度 E I C A の作成—因子的真実性の原理による項目分析 関西大学社会学部紀要, 7(2), 1-14.
- 山田順子 (1987). 大学生の親志向意識に関する研究 東京家政学院大学紀要, 27, 167-179.
- 山本八千代・竹元仁美・宮城由美子 (2000). 青年期男女の家庭・育児に対する態度の調査 母性衛生, 41, 223-227.
- 柳澤 慧 (1998). サイレントベビー—「おとなしい子」ほど, 未来は危険 クレスト社

Abstract

Attitude toward childrearing and the relevant factors of female adolescents:
influences of views on sex roles, feelings to children,
and attitude toward childrearing of mother

Shoso INOKI & Minori KATO

Attitude toward childrearing and the relevant factors were examined for female university students. The subjects were 939 female university students. A questionnaire was used, which consisted of scales on (1) attitude toward childrearing, (2) views on sex roles of both females and males, (3) feelings to children, and (4) attitude toward childrearing of their mother. Correlational analysis by multiple regression analysis was conducted. It was found that attitude toward childrearing of female university students was not influenced by views on sex roles nor attitude toward childrearing of their mother, but by feelings to children. The positive attitude toward childrearing was associated with the positive feelings to children, and the negative attitude toward childrearing was related with the negative feelings to children. The necessity of further investigation on the relationship between attitude toward childrearing and feelings to children was suggested.